

「地域に貢献」が使命

大垣西濃信金、23日に設立100周年

小川章理事長インタビュー



100周年の節目を迎え、意気込みを語る大垣西濃信用金庫の小川章理事長＝大垣市恵比寿町、大垣西濃信用金庫本部(撮影・坂井萌香)

大垣西濃信用金庫(大垣市恵比寿町)は23日、設立100周年を迎える。中小企業の経営を支え、地域経済の安定と成長に存在感を発揮する「だいしん」の戦略について、小川章理事長に聞いた。

(宮本寛)

―100周年を迎えた思いは。
1924年に大垣市長の東島卯八氏が庶民のための金融機関として立ち上げたのがスタート。昭和期の金融恐慌や戦争といった厳しい時代を経て、地域の信頼と支えの下、現在に至っている。「地域のために存在し、地域に貢献する」という金庫の使命を再認識し、課題解決を通じて地域社会の発展に貢献していく。

―金利のある社会の展望は。
再び政策金利の引き上げが予想されるが、為替は円安基調が当面継続されそう。ただ、2025年度の実質GDP成長率はプラス成長が続くとみられ、輸入物価の上昇圧力が一巡する中で、物価上昇率は鈍化すると予想され、内需を中心に景気回復が続くのではないか。

―県経済の見通しは。

専門職員が課題解決相談／顧客間の連携深化



23日に100周年を迎える大垣西濃信用金庫＝大垣市恵比寿町

【大垣西濃信用金庫】1924年12月23日、大垣信用組合が設立され、51年に大垣信用金庫に改組。2016年に西濃信用金庫と合併し、大垣西濃信用金庫となった。岐阜、愛知両県に31店舗4出張所があり、役職員数は415人(今年3月末時点)。24年3月期の期末預金残高は7779億5300万円、期末貸出金残高は3603億5200万円。

最近行った西濃地域の景況調査によると、収益は改善傾向が見られるものの、生産・売り上げ、資金繰りは鈍化すると予想されている。事業者には効率化やコスト削減、人材確保が求められる一方、預金金利の上昇で動きが活発となり、当金庫の夏の預金キャンペーンも例年を上回るご利用をいただいていた。貯蓄に対する意識は高まっており、預金者の利息収入は増加すると思う。

―強みや独自性は。

何よりも「フェイストゥフェイス」のつながりを大切に、お客さまの課題解決を図っていく。専門職員による相談拠点「ビジネスてらす」を運営するほか、経済クラブや経営者懇話会といった独自サークルで顧客間の連携を深めてもらい、ビジネスチャンスの拡大につなげる。他の金融機関が行わない先進的な取り組みにも戦略的に取り組み、サステナブルな方向性を追求する。

―人材の確保や育成は。

約20年ぶりの人事制度改革を実施し、等級・評価・賃金制度を全面的に見直す予定だ。幹部候補生の育成や役職定年制度の見直しを進め、能力に応じた配置を実現する。異業種からの中途採用も取り入れ、課題解決力を強化する。

―顧客や職員へのメッセージは。

「フェイストゥフェイス」の精神を持ち、誠実な姿勢で地域に貢献していく。また「不易流行」の考えで、守るだけでなく必要な変革を進め、次の100年、200年を目指して役職員が地域やお客さまと一緒に歩んでいく。